



👁️👁️ みどころ

ホン・サンス監督×女優キム・ミニ作品を、『それから』（17年）に続いて鑑賞。更に2作品も鑑賞予定だが、本作はキム・ミニがベルリンで銀熊賞（主演女優賞）を受賞した作品だから、その魅力をタップリ味わいたい。もっとも、彼女の魅力の本質は美女というより、いかにも韓国風の激しいセリフ回しにみる演技力・・・？

前半の舞台はハンブルク。これが、後半の江陵（カンヌン）を舞台とした物語とどう連動するのが1つのポイントだが、“韓国のウディ・アレン”と呼ばれるホン・サンス監督だけに、韓国の土着性が希薄で、おしゃれな雰囲気・・・。これは、フランスに留学した中国の第6世代監督、戴思杰（ダイ・シージェ）にも共通するものかも・・・？

それにしても、56歳のホン・サンス監督と36歳の女優キム・ミニが不倫関係にあることを公言したうえで、それをネタにした映画を作るとは！そして、それでキム・ミニに銀熊賞をもたらすとは！ホン・サンス監督恐るべし！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ホン・サンス監督×女優キム・ミニの第2弾を鑑賞■□■

4月27日に観たホン・サンス監督×キム・ミニの第1弾『それから』（17年）に続いて、ホン・サンス監督×キム・ミニの第2弾である『夜の浜辺でひとり』を鑑賞。これは、シネ・リーブル梅田がホン・サンス監督×キム・ミニ特集として、『それから』、『夜の浜辺でひとり』、『正しい日 間違えた日』、『クレアのカメラ』の4作を連続で上映しているためだが、そこまでの特集を組むのは異例。

それは、『クレアのカメラ』は第70回カンヌ国際映画祭アウト・オブ・コンペティション部門への出品、『それから』は第70回カンヌ国際映画祭コンペティション部門への正式出品だけだったが、『夜の浜辺でひとり』は第67回ベルリン国際映画祭でキム・ミニが主演女優賞（銀熊賞）を受賞、『正しい日 間違えた日』は第68回ロカルノ国際映画祭で金豹賞（グランプリ）&主演男優賞をW受賞と、素晴らしい評価を得ているためだ。私の採点では『それから』は星5つだったが、さて本作は？

■舞台はハンブルク！この女の本心は？本性は？■

『それから』は妻と新旧2人の愛人に対して口先だけで対応する（弁解する？）男、キム・ボンワン（クォン・ヘヨ）の軟弱ぶりが面白かった。また、それぞれのケースにおいて情け容赦のない“口撃”を加える3人の女たちとの緊張感あふれる会話劇が出色だった。本作もそれと同じように、導入部ではヨンヒ（キム・ミニ）と、その先輩の女友達ジョン（ソ・ヨンファ）との会話劇からスタートする。

本作は韓国の映画なのに、なぜかその舞台はドイツのハンブルクから始まる。それは一体なぜ？事前にチラシやパンフレットを読んでいると、それは妻のある映画監督のサンウォン（ムン・ソングン）との不倫に疲れた女優のヨンヒが、キャリアを捨ててハンブルクに住む先輩の女友達ジョンの家を訪れ、しばし美しいハンブルクの街を散策しながら心の傷を癒すためだということがわかる。しかし、スクリーンを見ているだけでは容易にそれはわからないので、ヨンヒの言葉や行動をしっかりと観ておく必要がある。とりわけ、ジョンおすすめのスープ屋を目当てにやってきた公園で、ヨンヒがある橋の前に突然膝を折り、祈りを捧げはじめる姿を見て、ジョンが「あれは何だったの？」と尋ねると、ヨンヒの答えは「自分が本当に望むものは何か確かめたかった」というもの。つまり、昨今はやりの「自分探しの旅」というわけだが、1度観ただけでそこまでの理解はなかなか……。また、ジョンとの会話では「男が自分に会いにくるならそれもよし、来ないのならそれもよし」と強気だが、2人で行った浜辺では、1人になって韓国にいる恋人への想いを抑えられず、浜辺に彼の似顔絵を描いていたから、ヨンヒの本心はサンウォンへの想いを断ち切れないようだ。

他方、ハンブルクに住むジョンの友人、ポールの家に招かれて食事をするシークエンスでは、空腹を隠そうとせずガツガツと料理にありつく姿が印象的だし、ポールとその妻を観察しては男と女の関係について韓国語で言いたい放題を語っているヨンヒの姿も印象的。これを観ていると、このヨンヒという女はかなり強烈な個性の持ち主。私はヨンヒの本性をそう読み取ったが……。

■後半の舞台は東海岸の都市、江陵。そこでの会話は？■

私には本作前半の舞台であるハンブルクも縁がないし、後半の舞台となる韓国東海岸の

都市、江陵（カンヌン）も全く知らない。そのため、“地の利”から本作の良さを感じ取ることは全くできない。また、江陵では女優のお仕事で昔馴染みだった男チョンウ（クオン・ヘヒョ）とミヨンス（チョン・ジェヨン）たちとの遠慮のない会話劇が始まっていくので、それに注目！もっとも、その偶然の出会いを映画館の前としたのはいささか便宜的すぎる。そんな小手先の細工をせず、堂々と昔の仲間たちと再会するシークエンスにしてもよかったのでは・・・。

それはともかく、皆が集まった会食の場で、「魅力的になった」と褒められたヨンヒが、ハンブルクでの自由で気ままな暮らしについて、また、男たちからもてたことについて語るが、それをチョンウたちが皆楽しそうに聞いてくれるところがミソ。さらに、ヨンヒがミヨンスに対して「今の恋人とつき合うようになってから一気に老け込んでしまった」と、ズケズケ失礼なことを言っても、ミヨンスがそれに反論しないところもミソだ。さらに、ここでも先輩の女友達ジュニ（ソン・ソンミ）は、ハンブルクのジヨンと同じように、一貫してヨンヒを優しく見守ってくれているから、ありがたい。

この昔馴染みとの飲食しながらの遠慮のない会話劇で面白いのは、私が読み取った通り、酔いに任せてヨンヒが強烈な個性を爆発させて、「価値のないものなんて考えたくない。きれいに消えたい」と語り、更に愛について激しく自己主張を展開し始めること。私は『それから』の評論でも、「あいまいな日本語では無理？この突っ込み方に注目！」と書いたが、この手のトコトン自分の主張に固執した大声での会話は日本ではありえず、韓国人特有のものだから、本作でもそれに注目！

■□■ベルリン銀熊賞（主演女優賞）の魅力はいかに？■□■

本作は前半の舞台をハンブルク、後半の舞台を江陵としたうえで、サンウォン監督との不倫に疲れた元女優ヨンヒをメインに据え、友人たちとの会話劇を軸に、彼女の心のひだを丁寧に描いていく映画。したがって、本作が面白くなるかどうかはヨンヒを演ずるキム・ミニの魅力の程度とその演技力にかかっている。そんな本作で、キム・ミニは第67回ベルリン国際映画祭の銀熊賞（主演女優賞）をゲットしたのだからすごい。キム・ミニは美人といえば美人だが、日本人にはあまりいないタイプで、激しいセリフ回しのシーンをみると「ああ、これが韓国女優の1つの姿」という感を強くする。そんな彼女なればこそ、実生活において56歳のホン・サンス監督と不倫関係にあることを記者会見で堂々と認めただろう。

他方、彼女については、いかにも韓国女性らしく、激しい言葉を機関銃のようにぶっ放す“動”のシーンがよく似合う一方、本作のタイトルどおり“夜の浜辺でひとり”浜辺に寝ころぶ“静”のシーンもよくキマっている。韓国は日本より寒いし、東海岸の浜辺は海風も強いから江陵の浜辺はよけいに寒いはず。したがって、そんな冬の江陵の浜辺では、いくら長いコートを着ていても、1人で横たわって寝てしまうのは如何なもの？下手する

と凍死してしまう恐れもあるのでは？

そんな心配をしていると、たまたま近くでたき火をしながら酒を飲んでた“ご一行様”の1人に声をかけられたのはラッキー。もっとも、これがたまたま知り合いの映画スタッフで、そこでは不倫相手の監督サンウォンが次回作のロケハンをしていたというのはいかにも作り過ぎ……。そう思わないでもないが、そこではまたサンウォン監督も含めて、映画仲間たちの間でヨンヒの辛辣な発言が相次ぐ会話劇が展開されるのでそれにも注目！ハンブルクに行った（逃げた）時は、女優への復帰など夢にも考えていなかったヨンヒだが、かつての映画スタッフやサンウォン監督との再会（？）とさまざまな議論の中、さあ、女優復帰への気持ちは芽生えてくるのだろうか？

前半と後半で全く違う女に変わるヨンヒ役を演じ、しかも全編にわたってサンウォン監督への想いと女優復帰の可否に揺れ動く女心を、すばらしい演技力で見せてくれたキム・ミニに拍手！

■□■奇妙な黒服の窓拭き男は一体ナニ？■□■

本作は第67回ベルリン国際映画祭でキム・ミニが韓国女優としてはじめて銀熊賞（主演女優賞）を受賞したものの、作品賞や監督賞とは無縁。つまり本作は、「キム・ミニという女優の美しさが全編を支配する作品」として話題をさらったわけだ。中国でもチャン・イーモウ監督やチェン・カイコー監督を代表とする第5世代監督は、中国本土に根差した映画から出発したが、第6世代監督になると『小さな中国のお針子』（02年）（『シネマ5』294頁）『中国の植物学者の娘たち』（05年）（『シネマ17』442頁）の戴思杰（ダイ・シージェ）監督のように、フランスに留学した監督もいる。それと同じように韓国でも、私の大好きなキム・ギドク監督をはじめその多くは土着の映画を作っているが、本作の前半はドイツの都市ハンブルクを舞台としている。それは、ホン・サンス監督が韓国の大学を卒業した後、アメリカに留学し“韓国のウディ・アレン”“韓国のゴダール”“エリック・ロメールの弟子”などと称されていることから十分理解できる。本作はそんなホン・サンス監督作品だから、江陵を舞台とした後半ではいかにも韓国風の議論が目立つが、ハンブルクを舞台とした前半はヨーロッパ的センスにあふれている。

しかし、後半のメインの1つとなる海辺のホテルの部屋でヨンヒたちが議論している時、ベランダでは黒い毛皮の帽子をかぶった黒服の男が窓を拭いているが、これは一体ナニ？また、この姿は部屋の中で議論しているヨンヒたちから見えるはずだが、誰もこの男に興味を示さず、何の話題にもならないのは一体なぜ？この窓拭きの黒服の男は、本作において一体何を意味するの？そう考えるとワケがわからなくなってくるが、ひょっとしてそれが韓国のウディ・アレン等と称されるホン・サンス監督流……？さあ、あなたの見解は……？

2018（平成30）年7月6日記